

《博士論文要旨および審査報告》

引田 梨菜 「ネパール人日本語学習者の  
日本語音声の習得の特徴  
—ネパール語に着目して—」  
——学位請求論文——

I 論文要旨

引田梨菜

本研究は、日本国内、ネパール国内問わず増加を続けているネパール出身の日本語学習者（以下、ネパール人日本語学習者）を対象に、ネパール人日本語学習者がどのような学習者で、どのような日本語の音声習得の特徴を持っているのか、ネパール語に着目して明らかにすることを目的としたものである。なお、本研究のネパールにおける調査は、2018年3月、8月～9月に現地で行った。また、ネパール語については、2019年東京外国語大学オープンアカデミーで学習したほか、野津先生についてネパール語の学習および研究を続けている。

先行研究では、ネパール人日本語学習者の来日後の日本語学校の様子等の事例研究が多い。その中で、ネパール人日本語学習者は騙されて来日し、学習意欲が低い学生が多いと述べられているが、手厚いサポートをしていくことで学校や教師に対する満足度が高くなり、学習動機が高くなった学校も見られた。しかし、ネパール人日本語学習者がなぜ留学先に日本を選択したのか、ネパールでどのような教育を受けてきたのか、日本語をどのように習得しているのか等については述べられていない。

そこで、まず、ネパールではどのような教育を受けてきたのか、ネパール人日本語学習者がなぜ留学先に日本を選択したのかについて明らかにした。明らかになった点は3つの観点でまとめた。(1) 学歴、(2) 英語の能力、(3) 金銭面である。その一方で、日本とネパールとの慣習が大きく異なることから、ネパール人日本語学習者が来日後に理解する必要があるものとして、試験の方法と成績の付け方があることがわかった。

次に、日本語を学習する教材についてである。現在、ネパール人を対象にした

教材はほとんどない。ネパール人日本語学習者が学習する環境としてこのままでよいのか、聞き取り調査を行った結果、現状では学習に苦勞している一方で、ネパール語訳があればよいわけではないこともわかった。ネパールの教育現場ではネパール語と英語が使用されている。そのため、どちらの言語も普段使わない言葉や書き言葉といった難しい言葉は理解しづらいという意見が挙がっており、教材には英語とネパール語の併記が求められることが明らかになった。ネパール国内で発行されている教材は日本語との3言語併記となっており、日本国内での教材にもそれが求められる。ここまででネパール人日本語学習者がどのような学習者であるか明らかにした。

そのネパール人日本語学習者がどのように日本語を習得していくのか、まずネパール語と日本語との関係性から探った。

日本語の学習はかなを学ぶところからスタートするが、ネパール人日本語学習者にとって日本語の学習のしやすさはそこにあった。日本語の五十音図の配列とネパール語のデバナガリ文字の配列はどちらもサンスクリット語の配列に則ったものであるため、ほぼ同じ配列となっている。日本語の文字は新たに覚える必要があるが、文字が持つ音韻はネパール語を利用できるため、ネパール人日本語学習者の心理的ハードルも下がり、学習が始めやすいと考えられる。

さらに、日本語の音声の習得について見ていくために、長音・促音・拗音に着目して知覚実験と生成実験を行った。加えて、ネパール人日本語学習者の特徴を明らかにするために、同様の調査を中国語の共通語を母語とする日本語学習者(以下、中国人日本語学習者とする)を対象に行い比較した。

その結果、ネパール人日本語学習者について知覚実験で明らかになったことは以下の通りである。

- (1) 着目する点ごとには以下のようにいえる。
  - ・長音：あまり得意ではないが、その分能力の向上も見られる。
  - ・促音：苦手ではない。
  - ・拗音：刺激語によって知覚の結果に差が出やすい。
- (2) ネパール人日本語学習者特有のストラテジーが見られた。

知覚した際に自身の理解語彙ではなかった場合に自身が持っている他の理解語彙に置き換えて認識していると解答の分析から推察される。

次に、知覚実験と生成実験の解答を比較すると以下のことがわかる。

- (3) 長音は知覚よりも生成の方が苦手である。

ネパール語の文字表記において母音の長短の区別があるネパール語を母語もしくは共通語として持っていたとしても日本語の母音の長短を弁別し、違いをつけて発音することができない。

- (4) 日本語の習得にはネパール語の正の干渉を受けている現象も負の干渉を受けている現象も見られる

先行研究では、ネパール人日本語学習者は会話の能力が非常に高くなる者がいると述べられていたが、以上のように日本語を学習する上で、特に「話す」・「聞く」に関してネパール語が応用されていることが明らかになった。今後ネパール人日本語学習者のさらなる増加が見込まれている以上、研究もさらに進めていく必要がある。

## II 審査報告

- |                        |   |   |    |       |
|------------------------|---|---|----|-------|
| (主査) 専修大学国際コミュニケーション学部 | 教 | 授 | 王  | 伸子    |
| (副査) 専修大学国際コミュニケーション学部 | 教 | 授 | 高橋 | 雄一    |
| (副査) 専修大学国際コミュニケーション学部 | 准 | 教 | 授  | 阿部 貴人 |

本学位請求論文は、日本語教育の領域のうち、学習者とその背景に着目し、まだほとんど着目されていないネパール国内の状況とネパール語の構造を分析対象とした、新規性の認められる論文である。本論文の構成は、全部で8章からなるが、最初に本論文の着想に至った内容と先行研究について述べたのち、ネパール人学習者とその背景、教育状況について、現地での調査結果による分析を含め、丁寧に論を展開している。さらに、ネパールにおける教育の状況と日本語教育について現代の状況を述べながら、日本への留学の意味についても言及している。さらに、ネパール語の、言語の構造について分析しつつ、文法の特徴、音声の特徴に焦点を当て、この言語を母語とする学習者が日本語を学習した場合の正負の干渉等について明らかにしながら、日本語との対照研究を試みている。そして、最終的にはネパール人学習者の今後の動向と、日本国内における状況等の将来的

な動向について分析を試みている。さらに、日本語との対照研究を試みながら、ネパール人学習者が日本語学習に親しみを感じる要素の一つとして、日本語の五十音の存在を上げている。さらに、そこから史的音韻論と、日本語の音素の構成に貢献しているであろうデーヴァナーガリーの存在に切り込み、日本語学の領域では、現在、あまり研究が深められていない悉曇の日本語における位置づけにも言及し、それを日本語学習の教材の一つとして利用する可能性についても述べている。

この論文の特徴であるが、まず、対象とする学習者の言語と環境に着目して、独自の分け方を設定している。一般的に言語教育の領域では、学習者を対象とする時、何語の母語話者かということから論を始めるのだが、本研究では、ネパール語を母語とすること自体の断定が難しく、どの言語が本当の母語かと設定するよりも、ネパール人と設定し、その背景を細かく述べることに意味があるということ、これも、ネパールという国の特殊性を明らかにした設定だと言えよう。

さらに、現地での数か月に及ぶ調査も貴重な資料であり、これまでにはない論文になっていると言えよう。当初は、もう少し調査を重ねる予定であったということだが、コロナ禍のため、ネパールへの入国も制限され、渡航も難しい状況であったので、それを日本国内のネパール人の調査に切り替え、国内での調査に予定以上に力を入れることになったということである。そのかいあって、教育とその背景についてのよい聞き取り調査ができています。

また、日本語との対照研究の部分では、日本の文字は漢字文化だという以前に、発音としてはデーヴァナーガリーの影響が強いということに改めて光を当てた論考だと言える。日本語教育の入門段階で導入することになる五十音についての知識は、ネパール人学習者のためだけでなく、五十音を学ぶすべての学習者のためにも有用に違いない。

総合的なまとめとして、言語の四技能のうち、聞く・話すといった音声が入る運用能力に長けているとみられるネパール人学習者は、それまでの教育的背景と、言語の状況から、音声的運用能力が高いということが証明できるが、一方、

学習教材や辞書等の整備が不十分な環境のため、文字や語彙の学習が不足しているという状況も明らかにされている。こうしたことから、今後、どのような点について言語教育の支援が必要であるかということも、明らかにされており、ネパールにおける日本語教育の今後と支援を考えていく展望も描かれている、成長をさらに期待できる論文であると認めることができる。

以上の点について、主査、副査ともに本論文の意義を評価し、今後も研究と教育を続けていくという点についても高く評価できるとし、博士号に値する論文であると評価する。

以上

### Ⅲ 学位授与要記

一、氏名	引田 梨菜
二、学位の種類	博士（文学）
三、学位記番号	博文甲第六十四号
四、学位授与の条件	学位規則第四条第一項該当
五、学位授与年月日	令和五年三月二十二日
六、学位論文題目	ネパール人日本語学習者の日本語音声の習得の特徴 —ネパール語に着目して—
七、審査委員	主査 専修大学国際コミュニケーション学部 教授 王 伸子 副査 専修大学国際コミュニケーション学部 教授 高橋 雄一 副査 専修大学国際コミュニケーション学部 准教授 阿部 貴人